

【現代語訳】

お手紙を拝見いたしました。

一、太子様（高仁親王）ご誕生の祝儀として采女殿（保田元則。高虎の重臣。藤堂姓を与えられる）を（京都に）のぼせられ、その御口上の趣旨を承知しました。また、拙者に諸白（清酒）大樽2樽を下され、かたじけなく存じます。

一、（高虎からの）ご祝儀の進物を早々に進上すべきでしたが、「いまだどこからも進上がないので、いま少し待ったほうがよい」と板倉周防守殿（板倉重宗。京都所司代）がおっしゃったので、「なにごと御指図しだい」と（返事を）申し、（ようやく昨日）16日に周防守殿からの使者を添えて進上しました。どなた様からの進上も周防守殿へ尋ねてからなされていますが、（周防守から）どれくらいという指示はありません。当方でおおよそ調べた内容を拙者が目録にして板倉周防守殿に見せ相談したところ、たいへんけっこうとの由で、板倉周防守殿が自筆で手を加え、それにしたがうかたちで進物の内容がきまりました。ほかの水準よりは少し多めになっています。太子様へは、太刀のみで、馬代はどなたからも進上しません。一位殿（家康側室の阿茶局。高仁親王の生母東福門院和子の母代り）と太子様の乳母へは進上するのがよいとの由、周防守殿がおっしゃいました。そのとおりにしてご祝儀を進上しました。詳細は采女殿から報告されるでしょうから、ここでは詳しく書きません。ご進物の目録も采女殿に渡しましたから、拙者からはお送りしません。

一、上方は相変わらずの状況です。京・田舎ともに、民百姓、町人、奉公人まで米がなく困っている状態だという話が聞こえてきます。

一、来年、相国様（太政大臣徳川秀忠）が御上洛されるかのような風聞があります。そのようなことがあるのならお知らせください。

一、大坂城に数寄屋（茶室）を完成させ、露地（茶庭）の造園なども拙者によく命じておくようにと（秀忠の）御意があった旨、先日、永井信濃守（尚政。秀忠付きの年寄〈のちの老中〉）から申して来ました。ずっと申し上げてきましたとおおり、あなた様の京都の露地の石鉢と前石（石燈籠の前にすえる石）をご進上されるのがよろしいのではないかと存じます。前石も石鉢も（手もとに）ないので、ただ今、どこかから探してすえようかと思っているところです。第一、適当なものはありません。大坂は、将来的には（秀忠そして將軍の）御居城にもなさるはずのところですので、このたび（石鉢と前石を）進上されるのがよいかと存じます。数寄屋の扁額と石燈籠、これらをご進上されるべきかと存じます。前々からそのように（高虎も）申されていたので、ただ今（高虎の）ご意向を確認しております。もしそれでよいとお考えでしたら、そちらで永井信濃守殿に相談してください。

一、相国様のご容体について、現在はお食事も召しあがっておられるとお知らせくださり、めでたく存じます。ますます御機嫌がよくなったというお知らせをお送りいただきたいものです。上下とも、そのことばかりを気にかけています。通仙院（医師の半井驢庵）はひどい病気なので、そちらへ行くこともできないように存じます。通仙院の薬を（秀忠に）あげられるようにしたいものです。

一、“中山の肩衝”（茶道具。安国寺肩衝とも。もと安国寺恵瓊の所持。当時は細川忠興の所持品だったがこの寛永3年、細川藩の飢饉を救うため酒井忠勝〈將軍家光付きの年寄〉に金1,800枚で譲られた）のことをたびたびお知らせくださり、かたじけなく存じます。さてさてけっこうな代金ですね。はじめて聞いて、驚きました。

一、拙者もこのところひどい病気で、いまま食欲がなく困っております。しかし大坂城の建築の御用があるので大坂へ行き、昨日戻ってきました。それゆえ御返事が一日二日遅くなりました。

上方での公用は、少しも油断せずにつとめます。精いっぱい御奉公をしようと朝夕油断なく存じております。

一、(高虎が) ご息災でたびたび(江戸城に) 登城されておられる旨、めでたく存じます。ますますご養生なさってください。また追って連絡いたします。恐惶謹言

十二月十七日

小堀遠江守

正一(花押)

和泉守様(藤堂高虎)

お返事

追伸 来年(秀忠が) 御上洛とのお話があるのなら、お知らせください。(秀忠から) 一位殿(阿茶局) に、来年ふらりと上洛しようと思っているので江戸への下向を延ばし、京都で上洛を待つようにと御淀があったとの由、かんおぎょうぶどの もりよ神尾刑部殿(守世。秀忠の家臣。阿茶局の息子) が(上方に) 来られたとき、申しておられました。そのようなことでしたらふらりと御上洛なさるのかもと思ひ、確認したく存じて申し上げます。以上